日吉神社　御由緒

社　格　県社　大正二年七月列格
神社庁長参向神社に指定　昭和二十八年四月一日（金一八号）

御鎮座　大宮・二宮・聖真子・十禅師　　弘仁八年（西暦八一七年）
客人・八王子・三宮　　貞観二年（西暦八六〇年）

御由緒　当日吉神社は、桓武天皇に御信任の篤かった、聖僧傳教大師が、弘仁八年（八一七年）東通の途次、当地の大領安八太夫の招きにより留錫、僧庵にて近江国坂本（滋賀県大津市）の、日吉大権現を影向され、安八太夫と図って、大比叡、小比叡と其の御配神の四柱の神を勧請し、後四十三年を経て、遺弟慈覚大師が更に三柱の神を御追斎申し上げ、所謂山王七社が揃いました。
其の頃から 、当地は、当社のために比叡山延暦寺の荘園となり、平野庄として永く栄えました。そして、 当日吉神社も次ぎ次ぎに中七社、下七社等比叡山坂本本宮にならい、この他本来の氏神様も境内に奉遷 して、永正の頃にはすべて五十六社と申し上げ、 本地堂、 楼門、宝庫、仏塔、八坊、 十六社家等があり 大いに栄えたのであります。
朝廷におかれましても、比叡山本宮と同一に御尊信あらせられ、神威益々昂揚し、嘉吉年間には、源義光の弟義綱すら当社に不敬の廉をもって美濃守を免ぜられ、又藤原成親の臣が当社に不敬をなした責任を問われて、 流罪に処せられた事は歴史の示すところであり、又元冠の役には、二十二社に準じて、鐘 を鋳てその拒止を祈らせられました。
文明五年（一四七三年）に至り、平野庄は比叡山領から、 斎藤妙椿の手に移りましたが、妙椿は三重塔を改築したり、その他多くが奉献を致しまして奉仕を怠らず、神威は益々輝きましたが、享禄二年（一五二九年）の揖斐川大洪水のため平野庄は東西に分断され、その後天正年間に至る四十余年の間に数回にわたる大洪水、暴風の難に遭い大被害を受け、 不破河内守（狛犬奉献）」 稲葉一徹（三重塔改築）等の奉仕も往時の御盛運に比へては物の数にもならず、御衰運の一途を辿りました。しかし乍ら日吉本宮のように兵火の難を受けることもなく、 豊臣秀吉の時には御朱印を賜わる等の庇護を受け、徳川家康は関ケ原の役に当社の御霊験を受け、元和に至りまして遺命により三代将軍家光は、天悔僧正に命じて代参せしめ、御神鏡をはじめ多くの奉賽に誠を捧げ、徳川義直公の尾張領として維新に至るまでの二百数十年間奉仕に励まれ、 御本殿の改築各社殿の御修築、燈明田の寄進、奉行の祭典奉仕等尾張領内の大社と

して名実共に重きをなし、殊 に貞享三年（一六八六年）には、輪王寺宮様の御綸旨により、坂本日本宮の御神躰の祖とならせられ、翌貞享四年には氏子のものも感激して神輿七社を御改造申し上げ祭典も昔の盛儀にかえり、 尾州公の御尊信も一層深く延享元年（一七四四年）に至り、二百七十両の大金を 献上致しました。又明治二十二年には古社寺保存資金の下賜を受け、氏子の熱誠により、大正二年県社 に昇格されました。

このように、 当日吉神社は御霊験著しく、一般氏子崇敬の誠心はまことに厚く其の後第二次世界大戦敗 戦の痛手にも屈せず、 昭和二十三年巨額の御修繕費を拠金し三重塔の解体修理を完成、その他境内の修 築を完了し、 戦時中中断していた祭典を復興し、 翌二十四年には地方出身の戦死軍人のため本境内に招 魂社を創建し、戦病死者の霊を奉斎しました。又昭和三十三年には金幣社となりました。

御祭神　山王二十一社

上七社

大　宮	大己貴神
二　宮	大山咋神
宇佐宮（聖真子）	湍津姫神
樹下宮（十禅師）	鴨玉依姫神
客人宮	白山姫神
牛尾宮（八王子）	大山咋神荒神
三　宮	鴨玉依姫荒神

中七社

大物忌神社（大行事）	大年神
牛御子	山末之大主神荒魂
新物忌神社（新行事）	天知迦流水姫神
下八王子	五男三女神
早尾	素盞嗚神
王子	鴨別雷神
聖女	下照姫宮

下七社

小禅師	玉依彦神
大宮竈殿	奥津彦神・奥津姫神
二宮竈殿	奥津彦神・奥津姫神

山末	鴨建角身命・琴御館宇志麿
巌瀧	市杵島姫命・湍津島姫命
剣宮	瓊々杵命
氣比	仲哀天皇

その他の主な御祭神

神明社	豊受姫神
多度社	天津彦根命
白鳥社	日本武尊
招魂社	戦死軍人

祭　事

月日	祭事
一月一日	歳旦祭
一月十五日	左義長
	交通安全祈願祭
一月下旬の日曜日	厄除・長寿・合格祈願祭
二月十七日	祈年祭
三月中旬	招魂社例祭
四月下旬土日	例大祭（山王まつり）
六月三十日	夏越の大祓
七月初旬	虫送り
七月十六日	早尾神社例祭
九月二十三日	牛尾宮例祭
十一月十五日	七五三
十一月二十三日	新嘗祭
十一月下旬の日曜日	神宮大麻・日吉神符頒布式

山田一夫